疫神遠離祕法中山直抄也享保十五年　孝東院日彰
寄加持大事　一本　同
邪気靈気遠離祕法　日彰
中山生靈死靈遠離　孝東院日彰
御祈禱經　享保十五年八月廿五日　孝東院日彰

などの書名と伝受者が列ねられてある。なを日影師は初め長壽院といゝ、のち孝東院と改められたと察せられる。

六牙潮師が積善房日開伝に云はれたように身延流中山流と並び称せられていても、江戸中期頃の積善房流も遠壽院流もその内容をなす相伝書は互に交流していて相当密接な関係にあったことが察せられよう。

昭和廿七年十月廿一日稿

法華經成立史上に於ける見寶塔品の重要性

木村日紀

一、佛証覚の一法と能統一の法華經

法華經が最勝教たることは經それ自体の構成上に現はれてゐねばならぬ。その原型である囑累品までは、方便品を中心とする一類と、壽量品を中心とする一類との相互関係に於て構成されている。前者は迹門で「法の開権顯実」であり、后者は本門で「仏の開迹顯本」である。斯く所乘の「法」と能乘の「仏」との両面を具現した処に最勝教たる所以がある。更に仏教思想史から見ると、仏成道証覚の一法から開展した全仏教が法華經に統一されている。經には前者を「於一仏乘分別說三」といひ后者を「唯有一乘法無二亦無三」と表示されてある。斯く能統一の立場に立つ処に法華經の最勝教たる理由がある。

而して仏成道証覚の一法と能統一の教たる法華經とは全く同一立場に立つものであるから、仏成道に於て所証の「法」と能証の「人」とが相互関係即ち融合してゐる如く法華經も本迹具現、所乘能相互関係に於て構成され而もその融合点として見宝塔品のある処に最勝教たる意義がある。

二、佛成道の体験と法華經の中心問題

經の文献から法華經の中心問題を検討すると、それが「仏知見」の開示悟入にあることが確信できる。それは「唯以一大事因緣故出現於世」とあるからである。処でその「仏知見」とは何を指すのか。經に「世尊法久後要当說真実」とある。この真実」が「仏知見」でなくてはならぬ。また「道場所得法」ともある。この「所得法」が「仏知見」でなくてはならぬ。処でこの文に該当する梵本では「Bodhi manda」（菩提座）とあるこれは金剛宝座を意味し「成道」其自体を指すのであり、仏証

覚の「体験」を指すに外ならない。して見るとこの体験が「仏知見」でなくてはならない。予はこの梵文に極めて重要性を認む。この文に照して見ると羅什訳の「道場所得法」の「法」は「体験」と同一意義を有すと解すべきである。仏陀の成道には「所証の法」(真理)と「能証の人」(仏陀)との二元とそれの融合とを含むそこが佛の「体験」である。換言すると。所証の「法」其自体は「もの言はぬ真理」であつて、其が二元の融合に於ける「佛陀」を通して「もの言ふ教法」となつて現はれ、同時に能証の「人」はその融合に於て法化し、向内的に法身仏、向外的に報身佛應身佛となつて現はれるのである。斯く佛陀に於て現はれた「法」と法に於て現はれた「佛陀」との二元の融合が正しく「成道」であり「体験」である。三論の吉蔵は法華義疏に左の如くこの融合との体験を「正観」と表示している

「問ふ己に開示悟入を知る云何なるをか諸仏の知見と名くるや答蓋し般若の異名正観の別目なり、今此の経に依らば則ち是四知あり、一には一切知、二には一切種知、三には自然知四には無師知なり、一切知は六道の衆生本來寂滅にして一切衆生は本來是れ佛なりと知るなり…」と、「正観」が「佛知見」であるから、佛知見の意味には「法」に対する佛の体験と「人」即ち佛陀自己に対する体験との二つの意義を含み、かつ「全人類が仏と同格たる」といふ体験も含まれてゐる。「佛知見」といふ法華経の中心問題に照して見ると法華経の構成は正しく「仏成道」を具現したものである。して二元の融合点を現はしたものが「見宝塔品」である。

三、見宝塔品の説相と佛成道の正觀

法師品に於て「若経巻所住処應起七宝塔……所以者何此中已有如來全身：」とある。見宝塔品の「宝塔」は正しくこの文より構想したものであり「有如來全身」とは明かに成道を指すのである。「法を観る者は佛を観、仏を観る者は法を観る」といふ阿含の文に照して法のある処に如來の全身があるのである法なくして仏はあり得ず仏なくして法はあり得ないからである この二元の融合を具現した処に見宝品の重要性がある。東方宝淨仏国も宝塔も多宝如來も仮想的であつて歴史的存在ではないたとへ仮想としても「無」を仮想したのでなく「有」を仮想したのである。「宝淨仏国」は佛成道の地金剛宝座を指す以外ではあり得ない。それは聖地四ヶ所の中成道の地が中心であり最も清淨であるからである。「宝塔」は菩提樹の周囲に阿育王が玉垣造られた点を仮想したものであることは「涌出」の表示で推考出來る。「多宝如來」は「法」を人格化した法身佛である。天台は文句に「多宝は法佛を表し釈迦は報佛を表す」と説述してゐる人格を有する佛の教法を「真なり」と証する関係上「法」を人格化して法身佛としたのであるが、真理以外に真理の教法化を証し得ないのであるから多宝佛は成道所顯の「法」以外のものではない。「二佛並座」は正しく成道に於ける所証の「法」と

能証の「法」との融合、体験、正観を表示したものである。吉藏は「初め正覚を成じ、寂滅道場にして諸菩薩の爲に雙べて二義を明す……今の一乘は真実となすと明し……今の身を真実なりと辯ず。謂く雙開なり。然るに乘と身とは更に二体なく即ち一の正觀を宜しきに隨つて之を說くのみ」と序文に述べてゐるが、見宝塔品は正しく仏成道の正観、人法相依の融合を「二仏並座」で表はしたものである。更に吉藏は「但し乘に二種あり一には所乘の法二には能乘の人なり、能乘と所乘とを具して一乘の義始めて円なり」と。この見宝塔品は正しく円の一乘を表示したものである。

無作三身の根本批判と本佛の根本開顯

河合陟明

宇宙本体は二つ在つて存すと云ふべきが如くである。然乍ら本体は一なるべし。宛もデカルトに於て神の本体と物心の一本体との二つが、スピノザに依て一本体としての神に歸決するが如し。さらばスピノザ乃至東西古今の本体は果して神なりや。カントも批評する如く西洋古今の本体は神に非ず。加之彼は遂に物自体を以て神とせり。否東洋に於る印度哲学等の Brahman 亦同様なり。然るに仏教に於ても、此誤を犯せる者が無作三身の本仏なり。而も其れを無始無終の本仏となす。あゝ迷源の如何に甚しきか。これ人文古今の大問題なり。さらば本体とは何ぞや、是れ実相・真如・法身に過ぎず。未だ断じて神に非るなり。私は之を「理本覚」と云い性惡法門と云い「神の quidiuris」となす。実相の根拠に立つて法華経洞観するに、一代の綱骨は記小と久成である。二乘作仏せずんば菩薩も成仏せず、乃至一切凡て成佛せず、仏陀も亦権者の神変のみ。一切は虚妄戯論に終る。然るに若し真に覚るや十界の全体を一挙に統覚するものであつて、茲に三乘の涅槃の真理性と実在性とが保証せらるゝものでなければならぬ。これ空間論に於ける涅槃の普遍妥当的・必然的なる実在性を說くものである。然乍ら更に最も大事なるものは実に時間論に於ける問題である。久成論は即ち是なり。今二乘を含む十界の一切が大乘の覚を得るとするも、その覚の内容が十界の一切を含む超越的絶対者としての「理」であつて、事としての客観的現実でないならば如何であるか。蓋し「事」とは、吾人の知つてゐる経験は実在界の全部ではないが、経験を因果の原理で押し拡げた客観的世界を事と称するのである。然るに若し單に理であるならばそこに理の一念三千が成立するのみで事の一念三千は成立せない。然し因果の理なるものこそ東洋哲学